A グループ

＋（プラス）

（マイナス）－

ヒト

- 問題を解決するために、支援員→行政→家庭をつなげることができた。
- 支援員の専門性が高い人がいる。保健師・保育士・栄養士。
- 支援員と家庭と職員との連携力
- 支援員が保育所に来て、園児の様子、家庭の様子を話し合うことができ、よかった。４月から家の方へ訪問してくれるとのこと。うれしい。
- 保育所で登降園の時、職員は「笑顔で元気で」あいさつをし、保護者から話しやすいように、相談しやすいように心がけている。
- 支援員とつながって、困っている保護者を少しでも助けてあげられればいいなと思う。（保育所の立場で）
- スタート⇔出口はどこに？研修はスタートしたが…。
- 新しい支援員参加者が少ない。

モノ

- 支援チームが訪問する際に、チラシを用意したことで受け入れられやすくなった。
- 家庭訪問の際、広報誌を持参。顔を覚えもらい、また支援員に興味を持ってもらうこともできた。
- 家庭教育支援が始まった。いろいろな専門の方がいる。
- 図書館だよりを一緒に配布。また話が広がる。
- 評価と期待
- 家庭を回るのが９月頃からである。
- 訪問に際して連絡がとれない。断られてしまうことも。枠組（予定）としての訪問、訪問のためのネタ（ツール）が必要。
- 会えない人にどう会えるようにしたらいいか。

コト

- 支援員と連携（役割分担）することで、学校の担任の心理的負担軽減につながった。
- 家庭教育支援チームの発足。携わる人もふさわしい人が選任されている。
- 支援を受けるだけでなく、互いに助け合える場になるといいなと思う。
- SSWが配置され、関係者を含めたケース会議を開き、以後の対応について行動。連携をもつことができた。
- 訪問型支援と並行して、相互に語り合えるサロンのような場も有効ではないか。
- コロナで会えずにいた時期が明けると、今まであまりしゃべってくれなかった人がしゃべってくれることも!!
- 現実的な課題
- 支援が必要な保護者は支援を求めることができない場合が多い。
- 話をしたい家庭は留守が多く、出会うのが難しいことも。

情報

- 支援チームと話をすることで、状況や課題、必要な支援が明らかになることがある。
- ＳＳＷを核にして、保健師や町行政等と連絡、連携。家庭の状況等について必要な情報を得ている。
- 公民館活動で、また別のルートから必要な情報を得ることができるようになった。
- 発達相談等におけるそれぞれの思いのくいちがいをまとめて聞ける。
- 「ここに来たら会えるかなと思って。」と、ちょっとしんどい時に話をしに来てくれる人もいるようになった。
- 訪問の日程を学校から配布してもらった。待っていてくれた家庭があった。
- 家庭訪問の際は祖父母の話もたくさん聞けたのでよかった。
- 支援員と保育所との話し合いの回数を増やしていきたい。
- 転入世帯など、地域のつながりが希薄な家庭にくいこむ道筋が少ない。

【ワークショップメンバー：３市町から参加の５名】
支援員２名　学校長１名　保育所長１名　支援サポーター１名

B グループ

＋（プラス）

（マイナス）－

ヒト

- 支援チームにふさわしい人材の選任
- 訪問型家庭教育支援、今年度から始まり、２回訪問した。
- チーム員
  - ・母子保健推進員
  - ・民生児童委員
  - ・元教師、保育士
  - 地域や家庭のことをよく知っている。
- 「エプロン先生」という支援を活用すると、先生にも子供たちにも活かされるのではないか。
- 訪問されていた方が訪問する立場に代わる循環型
- メンバー決定。熱意あるメンバー。
- 地域に根ざした人材
- 訪問件数がちょっと多いかなと思うが…。
- チーム員の世代交代。（新しい支援員）
- 家庭教育支援員の講座を修了したが、参加して支援する場所が見当たらない。
- 支援員の育成は今後の課題

モノ

- 訪問時は情報誌を持って行く。写真等も載っているので見てもらえる。
- 情報誌に写真と一言を載せてもらっている。
- チームで発行している情報誌＋使えるもの（例：スマホ依存のリーフレット）
- 訪問時留守の家庭が数件ある。

コト

- 支援員研修に職員が参加しやすい環境
- 教育（委員会）と福祉の連携が進んだ。
- 湯浅町に学び、全戸訪問型プロジェクトチーム発足
- どの市町もそうかもしれないが、
  - ・社会福祉
  - ・保健福祉
  - ・学校
  - 情報交換会がある。
- 支援員のチーム会議で内容を作り出している。
- 支援員の研修 橋本市ヘスティア →保護者懇談会で活かす。
- 学校との連携
  - ・職員とのコミュニケーション
  - ・支援員から入っていきにくい。
- 保護者向け子育て講演会。人がなかなか集まらない。
- 保育園：切れ目のない支援のために必要な連携の方法
- 支援員と学校・幼稚園・保育所をつなぐシステムをつくってほしい。
- 支援員と学校との必要な情報の交換や問題点についての共有の場
- チームが発足したが、運営はまだ。
- より内容の深いものとしていきたい。
- システム作りが必要

情報

- 情報ネットワークで情報を共有している。
- 各家庭を訪問して雑談しながら話をうかがう。
- 町の取組について知る機会が多い。
- 気になるケースについての必要な情報共有
- 家庭教育情報誌の発行。原稿依頼で人のつながりにも。
- 町の広報。情報誌。
- 訪問される人の感想が分からない。
- 支援がなかなか出来ていない。（難しい）
- 情報の共有

【ワークショップメンバー：４市町から参加の６名】
行政職員１名　家庭児童相談員１名　支援員１名　学校長１名　支援サポーター１名　保育園長１名

C グループ	ヒト	モノ	コト	情報
＋（プラス）	０才～中学３年生まで家庭訪問して（月１回）話を聞いている。 今年度４月から家庭教育支援推進事業が始まった。これから…というところ。 ＳＳＷ２人、家庭児童相談員２人が設置されているが、うまく機能しているのか分からない。 家庭児童相談員が２名いる。 リーダーが色々アドバイスをくれるのでよい。 家庭教育支援員には色々な人がいてよい。人選がよい。	情報誌「すまいる」を手渡す事で話がしやすい。保護者も興味を示してくれる。 情報誌「すまいる」を訪問時に渡すので、訪問しやすい。 ◎御坊市には適応指導教室メイトがある。不登校児童生徒に対する支援をしている。 ◎御坊市立児童センターがあり、気になる児童生徒を想定した支援をしている。 訪問ツール ・学級通信 ・学校新聞　の充実 開催会場	対象全家庭、会うことができた。 和歌山市第８ブロック子育て広場→２００２年～月１回。 和歌山市砂山子育て広場→２０１５年３月～月２回。 就学時健診時の支援員と保護者との対面 就学時健診に支援員も参加することにより、次回訪問時に話しやすくなる。 教育と福祉の連携が、うまくいっているのか分かりかねる。生涯学習課と健康福祉とつながれている…。	きょうだいが不登校。保護者がしんどいことを相談してくれた。 まだ事業が始まっていないが、講座に参加できた。 情報を大切にとっておいてくれている。 月１回定例会で訪問について報告し合い、状況がよく分かる。自分のヒントにもなる。 支援員との情報交流 情報誌の発行 就学前の子供や家庭の様子等が分かりにくい。 一人の子について、福祉、教育委員会等との情報共有が難しい。 気になる児童・生徒の必要な情報が共有されると、支援にうまくつながっていくのではないか。
（マイナス）－				

【ワークショップメンバー：４市町から参加の５名】
支援員２名　　学校長１名　　行政職員１名　　民生児童委員１名

D グループ	ヒト	モノ	コト	情報
＋（プラス）	今年度から小・中１年生の家庭への訪問が始まった。 リーダーの存在が大きい。 今年度から支援員等の育成が始まった。一歩進んだ!! 支援員になった人は皆ヤル気になっている。 少人数の小学校（小さなコミュニティ）なので、保護者はお互いに知り合い。声をかけ合うことができている。 訪問に対して、保護者も親としての在り方を考える機会をもったようである。 ・SSW ・SC ・不登校児童生徒支援員 ・訪問支援員 ２０１５年より、就園前の子供と保護者を対象に子育て広場を開催。（月２回） 年中児訪問（心理士、保健師、幼児教育、学校教育） 課題が見えてきた場合、次のアプローチの仕方を考える必要がある。 土日や夜に訪問することになる。支援員は大変だろうと思う。	毎月情報誌を作成し、訪問配布。（就学前、後と２種類作成） テーマを決めて、訪問時の話のきっかけ作りにしている。 目　指　す　ゴ　ー　ル 適応指導教室（クレセール） 情報誌に子供の写真が載っていて喜んでくれたこと。支援員から聞いた。 情報誌を持って訪問したところ、自分の子供が写っているので大切にすると、保護者が言ってくれた。インパクトがあったと思う。 訪問ツールとして名刺を作ってもらった。留守宅に名刺を入れておくことで、訪問したことが分かってもらえる。	組　織 小中連携 小小連携 こ保小連携 保保連携 土日に訪問しても留守で出会えないので、平日の夕方訪問したところ、保護者や子供に出会えた。訪問時間を変えてみてよかった。 小１、中１の子供がいる家庭を訪問することを知らせる通知を学校を通じて配布してもらったので、保護者が待っていてくれた。 課　題 ・リーダーの育成 ・支援員の育成 訪問型家庭教育支援を進めていく上での組織作り 学校	支援員と学校の交流ができたことがよかった。 地域で気になるケースの行政、福祉面での情報共有 学校だより、保護者会等で情報を発信している。 中学生の保護者に会えた時、きょうだいが学校に行きづらくなっているという話をしてくれた。少し関係ができてきているのでは…と思う。 現在は、保護者同士のコミュニティが出来ている。 訪問に関する情報が入ってきていない。（今のところ） すいあげる 他の地域から入ってきた時に、とけ合うまで時間がかかる。 固定的な人間関係なので変化していきにくい。
（マイナス）－				

【ワークショップメンバー：３市町から参加の４名】
学校長１名　　支援員１名　　行政職員１名　　民生児童委員１名

E グループ	ヒト	モノ	コト	情報
＋（プラス）	やり始めると人は寄って来る。 ＳＳＷ ＳＣ 支援員の育成。これまでの経験を生かした活動を行っていきたい。 検診や講座で保護者と会話することで、経験値アップ 今まで訪問されていた保護者が支援員として活動してくれるようになってきている。 新１年生の保護者にとって、支援員の訪問は安心感がある。 受援力（SOS）を引き出す人間に…。	乳幼児検診で絵本を読み聞かせ→話のきっかけに。 インスタグラムを立ち上げ、イベント情報等を発信。 訪問時に持参するチラシ作成を始めたところ、現在のスタッフだけの情報でも、地域で知らせたいスポーツやイベントが数多くあることが分かった。	人口や学校数等、やれる方法がある。 予算は教育委員会だけではない。 以前「子育て講座」を受講した保護者から、修了者の集まりの計画を促された。 今まで「つながる」ことが中心になっていたが、「つなげる」ことを意識するようになってきた。	家庭教育講座 情報はあらゆる所から入って来る。学校、地域、福祉等。 地域の情報も大切に。（防災、隣組のような）地域のつながりも同時に。 電話での内線の充実 必要な情報共有が学校とすぐできるようになっている。 支援員との情報共有ができている。 他の支援者との連携をもてれば。（学校、SC、SSW等） 学校が始まっている時間に子供が歩いていた等、支援員からタイムリーに連絡が入ったこともあった。 既存のイベントに乗っかることで、そこから開かれてくるものが出てくる。前に進めることもある。
（マイナス）－	不登校支援員の配置 地域コミュニティ不足 支援チーム意見の食いちがい	適応指導教室	「家庭教育支援の講座を受けているが、活動する場がない」と相談を受けた。 読みきかせ会やおしゃべりカフェ等やりたいことはたくさんあるが、本当に来てくれるか不安。	支援員として学校との連携を大切にしたい。 支援員が訪問後の報告を受けて、それをどう活かしていくか。 アウトリーチ型支援を行おうとするが、個人情報保護法があるため、子供のいる家を知ることができない。

【ワークショップメンバー：４市町から参加の５名】
支援員２名　　学校長１名　　行政職員１名　　公民館館長１名

F グループ	ヒト	モノ	コト	情報
＋（プラス）	訪問型家庭教育支援、今年度始まる。教員ＯＢ等、支援員のメンバーが決まった。 町内を３つの地区に分けて、それぞれ在住の人が支援員になっている。 他者に頼りにくい保護者に、一人でも話し相手が増える。 指導主事と一緒に、乳幼児検診が行われているところに絵本を持っていくようにした。 保護者の安心感は、子供の状態に反映する。	家庭教育支援チームが話し合える場所があり、訪問ツールとして、情報誌を構成・配布しながら全戸訪問している。	小・中間の連携 美山３小の連携 集合学習 地域に密着した取組を展開すると思うので、今までより良好な効果が得られそう。 就学時健診の時、支援員を保護者に紹介した。	卒業前に情報を入れることができた。 先進地域を参考に、来年度から訪問型家庭教育支援をスタートさせるので、他地域から伺うことができる。
（マイナス）－	経験者（リーダー）が少なく、手探り状態でのスタートとなりそう。 ・人材の発掘 ・リーダー 人材の構成、組織の骨組みづくりがこれからである。（急務） 支援員の人材不足 集まる機会を企画出来なかった。	地域コミュニティづくりにどうつなげればよいか？ 同学年の子供の保護者が話ができるのはすばらしい。	町にはチームがまだない。支援チームの立ち上げ 訪問型の必要性。理想は全戸型…。すぐには無理。現実はターゲット型。 小１児童がいないので、支援員の訪問がない。 保小中の連携。特に保小連携のシステムが…。 家庭の教育に対する意識	学校への要望等を聞き、間接的に伝えてほしい。 教育委員会と社会福祉協議会のテリトリー（役割分担）があいまい。 今年度から始まり、全容が分からない。他市町の取組例を。 支援員⇄学校 双方向の情報共有 家庭教育情報については、支援員はある程度持ってはいるが、それが深められる研修や、双方向性となると、一考の余地がある。

【ワークショップメンバー：４市町から参加の５名】
支援員１名　　学校長２名　　行政職員１名　　家庭児童相談員１名

Gグループ	ヒト	モノ	コト	情報
＋（プラス）	ＳＣ、ＳＳＷ、民生委員と家庭との関わりが充実。	訪問時に渡す情報誌を作成	町で本年度よりシステムが作られている。	乳幼児期～就学時の情報共有については、検診等である程度小学校にはできている。
	支援員一人一人が熱心で、前向きに取り組んでいる。	訪問用に備えて情報誌の作成に取り組んでいる。	学校との連携がとりやすくなった。	卒業後を意識した情報共有
	小学校の家庭科で、先生の苦労を見かねて保護者に働きかけ、体制を構築。（要請があった時）	相談をする場として、公民館の一室を借りる。		必要な情報交換において、学校が知らない話を聞くことができた。
	支援員の専門性の高い人がいる。保健師・元看護師。			SNSを利用した情報を発信することになった。
	それぞれの家庭に信頼され、深く関われる人はなかなかいない。		つなぐ機関への敷居 学校・家庭	入学前の情報が少ない。（転入等）
	公民館、民生委員、子どもクラブ代表等現在４人。どのような人に協力してもらえばよい？		教育と保健・福祉の連携システムが十分できていない。	小学校期以前の子供の情報を把握する手段が少ない。
	メンバー探し（家庭教育支援チーム）		保健・福祉との連携が十分でない。	就学後～義務教育終了後の情報把握が難しい。
	地域で立ち上げようとしているが、何から始めたらよいのか。		これから始めるので、どのようなシステムになるか分からない。	プライバシーに関わる事ばかりなので、学校の中へどれくらい入って、保護者とどれくらいのスタンスで入ればいいのか。
（マイナス）－				個人情報に関わる事柄（子育て世帯等）について

【ワークショップメンバー：３市町から参加の４名】
行政職員１名　学校長１名　支援員１名　支援サポーター１名

Hグループ

＋（プラス）

ヒト

- SCやSSWの活用・相談
- 再任用教員（元学校長）の的確なアドバイス
- 先進地への視察
- 支援員への研修
- 研修会の開催
- 今年からスタート。
- 助産師として関わる事例が多い。話が聞きやすい。
- ３課で連携会議をして、役割分担が見えつつある。
- 学習支援員の協力
- 他課の事業の現場の長と連携を取り、情報共有や情報交換をしていたら、他課の職員からも情報提供を求められた。今では、３課で連携している実感がある。
- 支援員、指導員、ＳＣ（スクールカウンセラー）がいる。
- 困っていることに関する家庭での対応
- 始まったばかりで、これから。
- 長く同じ支援員が継続できる方法は？
- 支援員と会ったことがなく、どんな人か知らない。
- 専門知識がないと支援しにくい。
- 母子保健推進員等小さい子供や子供のいる家庭に関わっている団体とも交流したい。
- 本当に支援を必要としているが来てもらえない人へ、どう届けるか。

モノ

- 通信の内容に苦労。
- 家庭への働きかけ。支援をする人。
- 訪問ツールなど、まだない。

コト

- プレパパママ教室
  - ・保護者同士のつながり
  - ・行政とのつながり
- 小中合同の行事があり、連携。
- 中学校卒業後の支援について話をする機会がある。
- 週１回の担任の家庭訪問
- ２つの市町の生徒がいるので、市町それぞれのあり方が違う。
- 始まったばかり（令和３年度）でシステムが確立していない。
- 市町に生徒がまたがっているので、対応に違いがある点。
- 要保護児童対策地域協議会が機能していないのでは。
- 研修の仕方やネタ不足

情報

- 未就園児の親子を対象として関わる。
- 学校、教育委員会、町の情報共有ができている。
- 関係機関との情報共有、ＯＫ！
- 保健福祉とのつながりがある。
- 訪問した支援員に、生徒自身が悩みを相談した。
- 事務局が定期的に学校に来てくれ、必要に応じた情報交換をしている。
- Ｒ４年９月スタート。情報誌も第２回目。少しずつ周知が！問題はチームで解決（多職種の人々の知恵）
- 関係課との熱量の差
- 関係課との情報交換
- 相談案件のプライバシーによる情報共有の難しさ
- 事業の周知方法
- 情報共有のための時間の確保

（マイナス）－

【ワークショップメンバー：５市町から参加の６名】
学校長１名　教頭１名　支援員２名　支援サポーター１名　行政職員１名

I グループ

＋（プラス）

（マイナス）－

ヒト

この人にお願いしたい！という人がいる。

ＳＣ（スクールカウンセラー）の存在。子供の内面把握。

元教員が多く経験が活かされている。

就学時健診の時、支援員も参加したのはよかった。

月１回のチーム会議でコミュニケーションが深まる。

昨年度少し減った予算が、少しつけられた。

地域の事をよく知っている人材

支援チームの人選

学校と地域のつなぎ役

どんな人材が望まれているのか？

支援チームのメンバーを誰がどうやって選ぶのか。

学校や保育所をどう巻きこむのか。

組織全体の意識を変えるための研修

地域のコミュニティづくり

支援員の担当は人数か？地区か？

支援員の存在をもっと身近に感じてもらうには？

モノ

子育て世帯、保護者に対する民間事業者間の理解と話し合い

みんなが興味を持てる情報誌

情報誌「ほっと」第２号を発行

乳幼児検診へ訪問し、本の紹介と読み聞かせ

校区が広範囲。支援員の対応が難しい。（人数は少ないが。）

保護者が興味を持つ記事

情報誌を読みやすいレイアウトにするには。

コト

風とおしのよい組織

商工会議所と小学校との関わり合い

本年度からシステムが動き出した。

小１、中１だけでなく高１のベルト増加。

地域のニーズはどこから得られるのか？

ベルト型 ユニバーサル型 ターゲット型 どの形態がよいのか。

冬場の訪問は雪が大変。

子供たちの第３の居場所づくり

自分の町には何が合っているのか。

情報

月１回のチーム会議で気になる家庭等の情報共有が密。

地域のことをよく知っているおじちゃんやおばちゃん

家庭教育支援コーディネーターと保育所が必要な情報共有を行った。

早寝・早起き・朝ごはん事業において、中→小への出前授業。

必要に応じた学校からの情報収集

一方通行

形がい化

訪問後、学校との必要な情報共有

情報の交流手段

年長児以外で心配な家庭がある。誰と情報共有すればいいのか。

【ワークショップメンバー：３市町から参加の５名】
学校長１名　　行政職員３名　　保育所長１名

J グループ

＋（プラス）

（マイナス）－

ヒト

家庭教育支援員に町の母子保健推進員になってもらっている。地域のことをよく分かっている人たちである。

訪問家庭と接点のある支援員が多い。

元教育関係者が支援員なので、保護者とも知り合いで話しやすいと感じた。

「支援員等の育成」スタッフ２７名で活動している。年間５回会議を開き、情報交換をしている。

支援員勉強会「橋本市『ヘスティア』」の取組について」Ｒ４年８月

コロナで家庭訪問が出来ず、電話での聞きとりになっている。

支援チームがない。児童委員等のこともあまり知らない。

チームとしての動き。何からスタートしてよいか。

モノ

不登校支援として、公民館と連携した子どもの居場所づくり

居場所づくり推進事業（こども食堂）を、ひとり親家庭や登校に困難がある生徒等に多く利用してもらっている。

不登校生徒への週１回支援（手芸・勉強補助・クッキング）

「施設及び訪問ツール」町内小・中がコロナのため家庭訪問ができないので、支援員として、電話での聞きとり。顔が見えず話しにくかったと思う。

支援員同士のつながり

支援員との関係で、居場所づくり→週１～２回の午後のみ。支援員確保が難しい。

コト

行政の教育、福祉の相談窓口をひとつにし、支援チームを立ち上げた。

小学校入学説明会で、支援員と保護者とでグループをつくり、入学前の不安などの聞きとりをして、話し合いをした。

小１、中１の家庭に訪問している。（２学期と３学期に１回ずつ）

就学時健診の時に、支援員が保護者と顔を合わせて町の家庭教育支援について話をした。訪問のハードルが下がった。

子育て中の視点で各家庭の現状をくみとることができる。

相談ケースについて、教育と福祉（特に要保護児童対策地域協議会関係）の情報共有の難しさ

訪問数が多くて、家庭状況をくみとることが難しい。

長期計画策定の時、学校教育、福祉部と協議したが、しっくりこなかった。

学校教育、社会教育、福祉の連携ができていない。

情報

乳幼児健診時に講師、家庭教育講座を開催していた。

広報誌に支援員の顔写真を載せることで接点ができる。

今年は情報誌「きらら」に、子供たちに人気の公園絵本館の紹介

情報誌「きらら」を年２回出している。

コロナ感染拡大により講座を開けなくなった。→パンフレット作成

不登校の居場所等の情報提供。

カネ

訪問型家庭教育支援事業として予算化 県補助金３分の２

不登校支援にも関わり始めたので、支援員報償費は町単独。（昨年は補正してもらえたが…）

【ワークショップメンバー：４市町から参加の５名】
行政職員１名　　支援員２名　　支援サポーター１名　　学校長１名